

「凍結融解胚移植」をする方法について

胚移植とは??

卵子と精子が受精したものを胚と呼びます。胚移植とは、体外で育った胚を子宮にもどすことです。

体外受精の治療において、採卵が終わり、受精した胚が成長して胚凍結することができたら、
いよいよ、その胚を子宮に戻して妊娠を目指します。

採卵を予定するまでは、卵巣の中の卵胞が育つことが重要になりますが、
胚移植を予定するときは、「胚が着床する子宮内膜」が重要になります。

体外で培養した胚を子宮内膜に戻す際には、

胚の「体外で育った日数」

が同じになることが重要になります。

子宮内膜の「排卵日からの日数」

たとえば、「体外で 5 日間培養した胚」を、「排卵から 3 日目の子宮内膜」に移植をしても、
胚は着床しません。胚が着床する時期、子宮内膜が胚を受け入れる時期は決まっているのです。

胚移植の種類

採卵した周期に行うものを、新鮮胚移植と呼び、

採卵した周期に凍結保存して別の周期に行うものを、凍結融解胚移植と呼びます。

* 初回の採卵では、新鮮胚移植を行っていません。(条件により例外はあります。)

凍結融解胚移植について

子宮内膜の「排卵日からの日数」を合わせる方法は 2 種類あります。

自然排卵周期での胚移植 と ホルモン補充周期での胚移植です。

	自然排卵周期	ホルモン補充周期
方法	卵胞が発育し排卵するのを確認して、排卵日を決定し、胚移植を行う方法。	自身での排卵を起こさず、 卵巣から出るホルモン(卵胞ホルモン・黄体ホルモン)をすべて、お薬で調節する方法。 卵胞ホルモンとして、 エストラーナテープ(貼付剤)または プロギノーバ(内服薬)を使用する。
排卵日の決定	超音波で卵胞発育を確認したうえでホルモン値を測定、その数値により排卵を促す注射(hcg5000単位)をした日の2日後を排卵日とする。(例外あります。)	排卵が起こらないので、黄体ホルモンを含む 膣坐薬を開始した日を排卵日と仮定し決定。
メリット	自分自身でホルモンを出すので、 ホルモン補充周期に比べて使用する薬の量が 少ない傾向がある。	胚移植を決定するまでの来院回数が、 自然排卵周期に比べて少ない傾向がある。 来院不可日があった場合、数日であれば 調整することが可能。
デメリット	排卵日を確定するために、卵胞発育を確認しなければならぬため、頻回の来院が必要になる場合がある。 胚移植の日が休診日や来院できない場合、 その周期は胚移植が行えない可能性がある。	自分自身でホルモンを出していないので、 薬を使用し続ける必要がある。 (使用開始日から8-9週間)
向いている方	月経周期が順調な方 頻回の来院が可能な方	月経周期が不順な方 スケジュールが多忙な方

胚移植は、体外受精の治療の中で、妊娠に到達するための大切な治療となります。

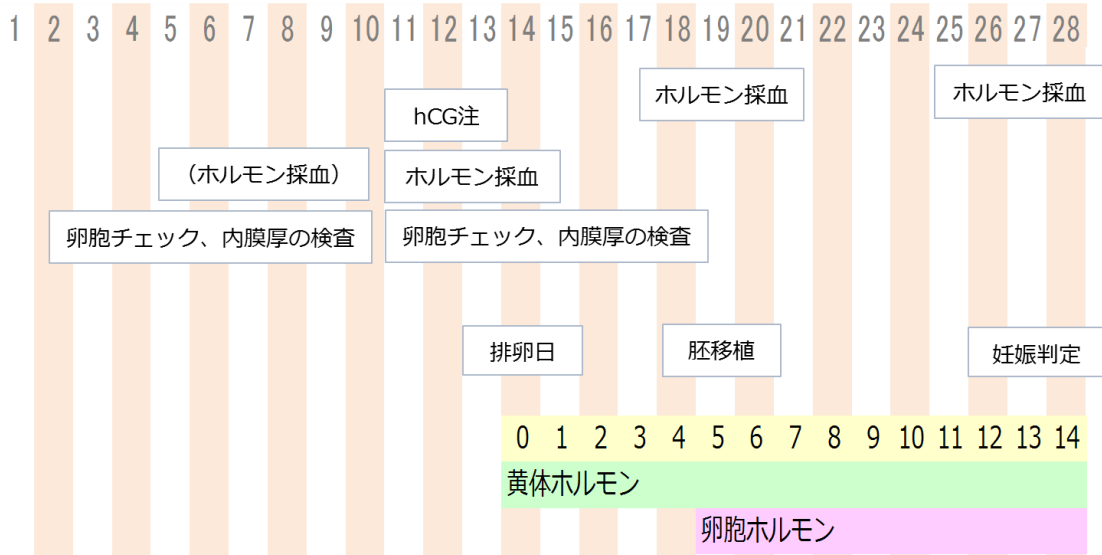
どちらの方法においても、出生率には変わりはありません。

どちらの方法が自分にとって合うかをご自身でも検討し、医師と相談して下さい。

ご不明な点は、医師・培養士・看護師にお尋ねください。

自然排卵周期での胚移植

矢印の日は
来院日です。

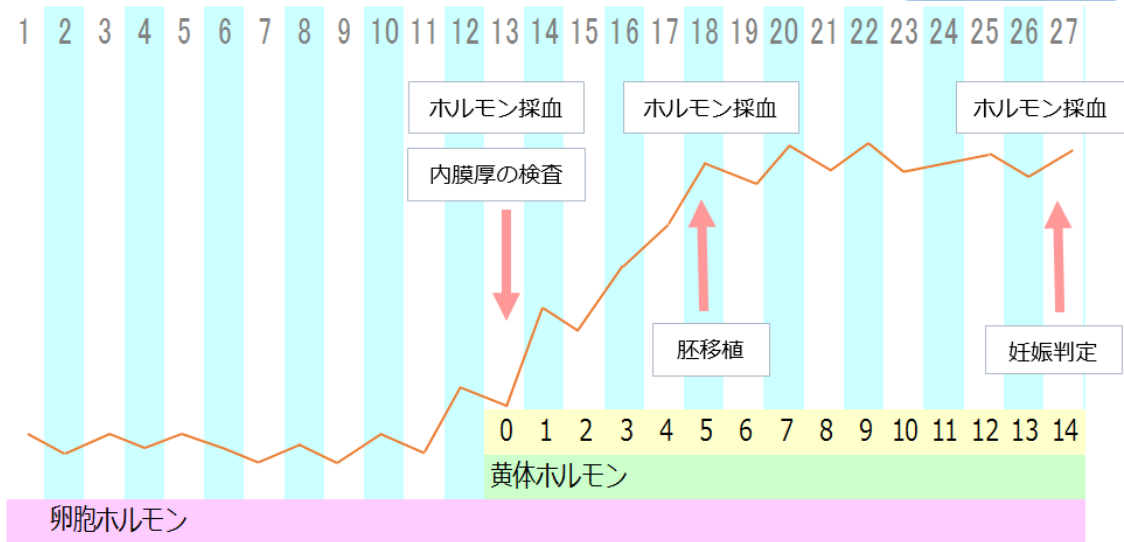


卵胞発育が見られるまで、数日の超音波検査が必要な場合があります。

排卵日から妊娠判定の日まで約2週間、黄体ホルモン補充を行います。

ホルモン補充周期での胚移植

矢印の日は
来院日です。



卵胞ホルモンの薬は、胚移植をする前の周期に処方いたします。月経が来たら開始してください。

排卵日と仮定した日から妊娠判定の日まで約2週間、黄体ホルモン補充を行います。